

# 平成 30 年度 旧今治管内生徒指導夏季研修会 実施報告書

## 講演内容

- ・演題 「学校に行けない子どもたちに必要な理解と支援」
- ・講師 NPO法人えひめ心のつばさ 大野 まつみ 氏



### 1 「NPO法人えひめ心のつばさ」について

#### (1) 翼教室

長期欠席の子どもたちを専門的にケア

#### (2) つばさの会

月2回、保護者の学習会で家庭の悩み、子育て相談等を行っている。また、年1回「子どもたちのSOSを受けとめて」という拡大学習会を行っている。

#### (3) カウンセリングルームつばさ

翼教室の子どもたちだけでなく、青年・成人・一般の方のカウンセリングも行っている。

### 2 「不登校」と呼ばないで

不登校=登校せず → 行けるのにわざと登校しないという差別的な意味

長期間学校を休む → ありのまま「長期欠席」

えひめ心のつばさでは、不登校という言葉を使わない。学校へ行けない子どもたちは、不登校と呼ばれることに傷付いている。

### 3 「翼教室」との出会い

(1) 個別カウンセリングで相談した上で入所を決める。

(2) 保護者と子どもが学校のことを一切考えなくてもよい環境をつくる。

(3) 学校長へ届け出ること、翼教室への通所日数が出席扱いとなることが認められる。

(4) 子どもが対人恐怖の真ただ中にいる間は通所できない。翼教室に通うことができるようになるまで、ゆっくりと心のケアをする。平均で2～3年かかる。

### 4 在籍する学校への定期連絡

義務教育…「学校へ行かなければいけない」と子どもは考え悩んでいる。

→ 学校へ通うのは「権利」であり、「義務」ではない。

→ 罪悪感 → 鬱状態へ → 自ら命を絶ちたいという考えになる。

翼教室では、子どもの命を守るために子どもの学校恐怖症の心の治療を最優先している。

その為に緊急にすることとして、

① 親や学校からの一切の登校刺激を止めること。

② 「もう学校に行かなくていい」「学校よりも君が一番大事」と親から子どもに言葉できちんと伝えること。

学校そのものを絶食する → 学校恐怖の始まっている子については、保健室登校、相談室登校も止めさせた方がよい。

学校から家庭連絡はすべて翼教室を通して伝える。翼教室が学校と保護者とのパイプ役になる。

→ 長い間学校に行けないでいると、子どもも保護者も心がしんどく、鬱状態になっているのをケアするため。

学校と翼教室が常に連絡が取れる状態を保ち、必要な情報のみ家庭に伝えている。

## 5 翼教室の毎日

### (1) 個別相談・毎日の学習

心のケアを留意した学習時間であるが、内容は、数学（算数）・英語・国語の学習を、現行の教科書で、個別で基礎からみっちり教えている。

### (2) スポーツを楽しむ

- ① スポーツでのトラウマを持っている子どもも多く、その克服のための大きなケアの一つに。
- ② 学校復帰した時に、競技のルールがきちんと学習できているための指導も。

### (3) 集団活動

- ① 年間行事計画に添って、運動会や合宿、キャンプ、修学旅行、その他の学校で行う行事のほとんどを、週1のペースで行っている。

（例）勝ち負けにこだわらず、みんなが助け合える運動会をつくる。

- ② 地域参加型の行事も。

### (4) 翼スペシャル Lesson

普段なかなかできない理科の実験や社会科、英会話、美術など、専門家による特別授業。「楽しいヨガ教室」、「地球環境とマラリア」、その他の科目。

### (5) 親子行事

保護者参加型の参観日で1ヶ月に1回行う。家と集団の中での子どもの違いへの理解を深めてもらう。その中の一つ「トーチトワリング」は、子どもたちが多くの方の前で演技し、感動を呼んでいる。

## 6 長期欠席についての分析と指導法

### (1) 第一期「潜伏期」（3～4歳から小学校低学年が多い）

- ① だいたいの保護者が気付かず、集団で過ごすのが難しいという自覚がない時期。
- ② この時期に発見できれば、先への進行を食い止められる可能性が大きい。

### (2) 第二期「歩行期」

「学校に行きたくない」という心とうらはらに登校し続けている状態。

→ 親や先生に言えない → 一人悩む → 身体に現れる

### (3) 第三期「進行期」

- ① 衰弱、身体症状の悪化 → 医療機関に行くが何も異常は出ない。
- ② 子どもは「学校に行きたくない」と言わないし、思いたくない。

### (4) 第四期「放出期」

- ① 心が追い詰められ、自死を考え始める。
- ② 「学校に行きたくない」とついに口にようになる。
- ③ この時、保護者や学校は、学校に行けるように誘導してはいけない。なぜなら、子どもは心を閉ざして人間不信に陥る。
- ④ この時期に来たら、長期欠席の状態（子どもの心の傷）はすぐには治らない。
- ⑤ 専門家による心のケア（カウンセリング）が必要。
- ⑥ 心療内科や精神科に連れて行ってはいけない。（不必要な投薬による二次被害を防ぐ）



### (5) 第五期「内向期」

周囲に対して人間不信を強め、誰よりも自分自身を激しく憎む。鬱病のような症状や場面緘黙（かんもく）が現れる。

## 7 どうやって子どもたちを救うのか

- (1) 第1段階のケア…人間不信があり、自閉ぎみ。両親や家族へのカウンセリングによって本人への間接的なケアを続ける。
- (2) 第2段階のケア…対人恐怖や自己不信が少し和らぐ期間である。少しずつ教室へ通えるようになる。家庭と教室とで一致した心のケアを続ける。
- (3) 第3段階のケア…自他からの「評価」から呪縛を振りほどいていく期間。少しずつ自分の存在価値を実感し始め、自分らしさを取り戻していく。
- (4) 第4段階のケア…自分自身を大切に思い、社会へ復帰したいと願うようになる。  
ただ、学校復帰はすぐにできない。 → 弱点を徹底克服（心のリハビリ）
- (5) 第5段階のケア…最後の弱点克服。親子以上の親密さになっていないと、学校に行けなくなった理由は聞けない。本当の理由はなかなか言わない。そこが聞けると克服すべき点があり、具体的な弱点克服への指導が始められる。

## 8 学校へ復帰する頃の支援

- (1) 修学旅行…さまざまな集団行動、事前学習が必要。 → 社会性が養われる。
- (2) 一般の普通入試を受けて高校進学
- (3) 「巣立ちを祝う会」…翼教室の卒業式。これまでの33年間で650名卒業。全ての子どもが学校または社会に復帰して、現在も後戻りなく元気に活躍中。